

第43回 体育祭

9月6日、秋晴れの空のもと、第43回体育祭が本校グラウンドで開催された。学年対抗で行われ、各学年が勝利を目指し一致団結した。総合成績は、1位が486点で3年生(赤組)、2位は349点で2年生(青組)、3位は245点で1年生(緑組)となり、3年生が1年次から3連覇の快挙を達成した。



3年赤組 3連覇

体育祭は宮下翔空さん(3-2・吉田南中)の「仲間と力を合わせて全力を尽くす」という選手代表宣誓で幕を開けた。

去年までは文理で分かれていた全員リレーは、今年は初めて2クラスごとに行われ、二・三組、一・四組、五・六組で実施されたが、競技は白熱し盛り上がった。長い大



松陽タイフーンでは竹を離さないように心をついに駆け抜けた。

きな竹を10人で持つ「コーン」を回りのチームに繋ぐ「松陽タイフーン」は男女選抜の生徒で行われ、前半の女子は差は開かなかったが、後半の男子で3年生が差をつけ圧勝した。

音・美全員バラエティリレーは、音楽科・美術科の生徒が段ボールを積み重ねて運んだり、袋に入ってびんぴんと跳ねたりしながらゴールを目指す大変な競技だが、楽しそうに競技する姿に普通科の生徒から大きな応援の声があがった。



音・美全員バラエティリレーで、積み重ねた段ボールを運ぶ生徒。バランスをとって走るのは意外に難しい。



体育コース生の「青春の鼓動」を初めて見る1年生の応援席からは驚きの声があがった。

茶殻を染色で活用へ

松陽高校家庭クラブ

今年、初めて荒茶生産量日本一となった鹿児島県。松陽高校周辺でも茶畑が見られる「松元茶」も有名だ。本校の生徒会でも松元茶のPR活動として、文化祭でお茶の振舞いを行い好評だった。その際にどうしても出る茶殻については、今まで廃棄せざるを得なかった。そこで、本校家庭クラブの有村葵さん(2-1・谷山北中)、田脇瑠璃さん(2-1・岳南中)、森梨世さん(3-8・開聞中)、平野由唯さん(3-8・武岡中)が、その茶殻の活用について研究。試行錯誤の結果、ハンカチの染色に活用することに成功。その成果をSDGs(持続可能な開発目標)の教材としてデジタル紙芝居を作成して、地域の保育園で披露し好評を得た。



茶殻を使って染めたハンカチは、「まつもとまるっとマルシェ」で高齢者の方にプレゼントされた。

メンバーは当初、茶殻が埃を吸着する性質を利用した清掃での活用や、天日と電子レンジで乾燥させた茶殻で脱臭剤を試作するなどの自然な色合いを染める可能性も検討したが、最終的にはSDGsが目的であったことから、廃棄される茶殻のみを使用し、他のもので前処理をしないことにした。ハンカチは、染みのある自然な色合いを染める可能性も検討したが、最終的にはSDGsが目的であったことから、廃棄される茶殻のみを使用し、他のもので前処理をしないことにした。ハンカチは、



紙芝居は、温かい雰囲気を出すため水彩画で描き、デジタルで仕上げた。

るなどいくつかの利用法を検討した。そして、より有効な活用方法として染色に行き着いた。ハンカチを豆乳で前処理することでより良く染まる可能性も検討したが、最終的にはSDGsが目的であったことから、廃棄される茶殻のみを使用し、他のもので前処理をしないことにした。ハンカチは、

「つくる責任、つかう責任」を、やわらかいタッチのデジタル紙芝居「ちゃっぴくんのだいぼうけん」にまとめた。それを松元中央保育園の園児たちに披露し、「地域の特産物を大切に、資源を大切にすること」を園児が分かるように丁寧に伝えた。また、鹿児島市役所松元支所を訪問し、地域への発信も行った。今後も、染色技術の研究に止まらず、SDGsの啓発活動に取り組んでいくという。

〔内野心春・坂元咲愛〕

高校生記者トヨタを取材

県高校新聞大会

11月8・9日に鹿児島トヨタ本社(鹿児島市西千石町)で、県高文連主催の第2回県高等学校新聞大会が行われた。松陽高校からは新聞同好会の4名が参加。甲南高校、大島高校、鹿児島中央高校、志学館高等学校等からも新聞部や新聞委員会の生徒が参加し、19名の高校生が2日間の日程で交流新聞の作成を行い新聞作成の技術を高めあった。



有名なトヨタの生産方式「カイゼン」について説明を受ける高校生記者

大会1日目では、日本を代表する自動車メーカーのものづくりへのこだわりや地域貢献等について取材した。鹿児島トヨタの社員から、トヨタが近距離モビリティの開発等で高齢化社会にも対応した乗り物づくりに取り組んでいる事例などの説明を受けた後、参加者は社員に熱心に質問していた。大会会場での新聞の作

初対面で不安の表情だった各校の生徒たちも、全国総文を経験した各班のリーダーの生徒の的確な指示のもと協力して作業を進めていた。参加した生徒は「自分のことだけではなくクラスの生徒のことを考えて行動できるようになった。新聞作りを通してチームで協力する素晴らしさを知った」と感想を寄せた。〔立野美吹〕

論説

対話型AIへの依存拡大

大切にしたい人間同士の会話

AI(人工知能)は有能である。特に、文書や絵の作成、写真の加工等の技術において力を発揮する。そのAIの技術群の一つとして人間と自然に会話することに特化した「対話型AI」がある。これは悩みの相談やオリエンテーションなどにも利用され、手軽な会話相手として急速に普及している。しかし、便利な対話型AIも万能ではない。世界では対話型AIの利用を原因とした事故も発生している。アメ

リ力では、精神が不安定だった男性の被害妄想に対話型AIが同調したことが原因となり、男性が母親を殺害、自ら命を絶つたとして遺族側がAI開発研究企業を提訴する事件が発生した。その他にも、AIが犯罪に関する情報を利用者に提供していた事例が発覚している。現代は「ストレス社会」と呼ばれ、私たちは多様なストレスを抱えて生活している。そうした生活で蓄積したス

今やAIは人間の生活を効率化するだけでなく精神的にも支えるようになってきている。対話型AIの特徴として、利用者の発言や考えを否定しないように設計されているという。しかし、孤独感を抱える人間が、対話型AIに依存することは、無責任に提供された情報に振り回されることにつながり、誤った判断や行動を促される凶器となりうる。このような対話型AIに起因した事

〔長野雄太〕